

九州を愛する人々に聞く

これからの九州、
どうしていくべきですか？

Dream 66

九州に本社を持つ企業や団体のトップに九州の未来にできること、これからの夢を語っていただくシリーズ、今回は株式会社ケアリングの代表取締役社長である中尾光明さんにお話を伺いました。

九州を外国人雇用の 最前線に

まったのは九州・福岡です。私は外資系企業での勤務を経た後、黎明期だった日本の介護業界に飛び込み、様々な経験を経た後現在の会社を興しました。その経験を基に日本の介護とアジア、特に中国との関係からお話いたします。

実は中国も日本同様、高齢社会を迎えています。かねてより行われていた「ひとりっ子政策」により、中国では若者人口が減少しました。昨今、その政策は終了したものの、長く続いた「ひとりっ子政策」の影響で、社会的なインフラは完全に「ひとりっ子政策」に対応したものしかありません。例えば教育費は跳ね上がり、一つの家庭が複数の子どもを育てるには、莫大な費用がかかるのが中国の現状なのです。

このように若者が減少し、高齢人口の割合が増えたため、全国人民代表大会（中国の国会）において、介護問題への対応が急務とされ、各地で介護サービスがスタートしました。

これを受けて、企業や地方の各省がまず行ったのは介護先進国である「日本に学べ！」というもの

中尾社長が運営する介護施設では「利用者が笑顔で過ごせる場所」が大きなテーマとなっている



中国から研修で訪れたスタッフたちと一緒に中尾社長（写真中央）。「中国では異業種から介護業界へ参入も多く、熱い視線が注がれる事業なのです」



です。九州は地理的に中国に近いこともあり、多くの企業が視察にやってきました。当社も中国で介護施設を運営する企業と提携し、私はその企業の顧問も務めています。彼らが最も興味を示したのは「小規模多機能型居宅介護」。通いの介護を中心に、「訪問」「宿泊」といった介護サービスも受けられるものです。中国の地方都市には「社区」という壁に覆われた中流所得層の集落単位があり、その中には日本でいう公民館のような施設が備えられています。それを小規模多機能型の介護施設に改装して利用したのです。さらに、食堂、保育所などの機能を付加し、日本と同様の施設をさらに中国に合うように発展させています。

今後は中国だけでなく、高齢社会を迎える東アジア諸国も多い。そのため、日本の介護業界を見本にする諸外国も増えていくことでしよう。

海外企業との交流は九州をPRするチャンス

先ほど申し上げたように当社は中国の企業に協力しているので、

自社の施設にスタッフを受け入れ実地研修を行っています。彼らを仕事の合間に九州の温泉地などに案内すると、とても喜んでくれました。こうした人材交流は風光明媚な九州の自然や美味しい料理といった、各地の魅力を海外の人々に直接体験してもらういいチャンス。視察に訪れる外国の人々を九州各地へお連れすることも少なくありません。

「海外技能実習生制度」の改定により日本の介護の現場では今後、多くの外国人スタッフが活躍することでしょう。その多くはアジアの人々です。九州、なかでも福岡はアジア諸国との交流の歴史が古く、外国人の受け入れに寛容な気質を持っています。福岡は日本の介護発祥の地でもあるので、そうした海外からの人材を受け入れる地域のトップランナーとして積極的に海外の人材の受け皿となることを望みます。そして、それらの人々が滞在中に九州の魅力を知ってもらえるように、交流の場をつくるのが望ましい。彼らは世界に九州の魅力を伝える伝道師になってくれるはずですから。

株式会社ケアリング

代表取締役社長 中尾 光明 なかお みつあき

◎プロフィール

1956年、大分県中津市出身。法政大学卒業後、株式会社キヤノンに入社。後に、ドイツに本部を置くシーメンス社の日本法人で医療事業部門の営業統括をおこなう。日本で初めてとなる介護事業会社「コムスン」の立ち上げに携わり、その後独立。医療、介護の分野で培ったノウハウを活かし、2000年に同社を設立。中国、台湾などの介護事業の顧問も務め、日本と世界を行き来する日々が続いている。

